

JURILIRO
COORDINATE

百合色 コーディネート

ふたりのキス模様

挿絵／瀬奈茅々々
あらおし悠

立ち読み版



プロローグ あの娘と出会った

第一章 初めてキスした

第二章 あの娘と、もういちどキスしたい

第三章 保健室でいっぱい触って

第四章 茉友の部屋でファッションショーした

第五章 いつかふたりでステージに

エピローグ ふたりでお嫁さんになってみた

登場人物紹介

YURI-IRO COORDINATE
CHARACTERS

せんばなつき

千羽夏希

ファッションデザイナー
を夢見ている少女。制服
が可愛いという理由で志
望校を受験。

あやもりまゆ

彩守茉友

夏希と同じ学校を受験し
た少女。雑誌のモデルな
ども務めている。



私服
PLAIN
CLOTHES

私服
PLAIN
CLOTHES

「女の子同士でも、スキヤンダルになるのかな……」

恋人なわけじゃなし、友達同士の悪ふざけや事故ということで通ればいいけど、その先の展開が想像できない以上、絶対に他人の目に触れさせるわけにはいかない。

夏希は毛布から顔を出し、天井を眺めながら溜め息を漏らした。

「……………キス、しちゃったんだ……………」

指先で、唇をなぞる。そこは今も、彼女に触れているかのように、甘く疼く。

女の子同士なら、遊び半分でキスする人もいるだろう。多分、珍しいことでも特別なことでもない。

ただし、それもファーストキスでなければの話。ハプニングとはいえ、同性で唇を合わせるなんて、普通は嫌悪してもおかしくない。現に、茉友は逃げた。

「ああ……………あたし、何てことしちゃったんだろう。せつかく……………せつかく友達になれたと思ったのに……………」

思いきり大声で自分を叱りたい。でもそうすると下にいる母親に聞かれてしまうので、うつ伏せになって枕で声をくぐもらせた。感情を全解放できず、逆に鬱憤がたまる。

あんなものは、ただの事故。すぐに謝っていれば、こんなに苦悩せずに済んだはず。

「それなのに……………どうして、あたし……………」

自分の行動が信じられない。離れるどころか彼女を抱き寄せ、唇を押しつけるなんて。あれでは、不意打ちでキスを奪ったのと同じことじゃないだろうか。

紆余曲折の末、仲良くなれたと思った矢先に、この大失態。開きかけた彼女の心も、きつとまた閉ざされてしまった。最悪の場合、逃げ回っていた時よりも。今度は誤解や説明不足なんかじゃなく、実行犯なのだから。

「女の子同士ってことで、ノーカウントに………ならないよねえ。泣きそうな顔してたし……。あの反応って、やっぱり彩守さん……初めてだったんだろうなあ……」

もしそうなら、なおのこと罪は重い。どれだけ謝れば許してもらえよう。そもそも許してもらえないチャンスがあるんだろうか。考えれば考えるほど、絶望的な気分になる。

「甘いこと考えちゃ駄目。そうだよ、もし立場が逆だったらどうする？ 許せる？ あたしが、彩守さんにああいうこと………されたら……」

眼を閉じ、その場を想像する。

目蓋の裏に、茉友が現れた。どことも知れない、何も無い空間に、ひとりで佇んでいる。怒っているんだろうか、泣いているんだろうか。こちらを見詰める瞳はどこか寂しそうで、夏希の胸の奥を、小さな針のようにチクツと刺す。彼女は、地面を滑るように、ゆつくりとこちらに近づいた。細い腕を夏希の腕に回し、うっとり眼を閉じて、唇を寄せてくる。夏希も唇をかすかに開き、触れ合う瞬間を待ち受け、そして――。

「……って、何してんのよ、あたし!!」

ハッと我に返って眼を開けば、抱き締めた枕にキスする寸前。夏希は自分に戦慄した。茉友とのキスを嫌がるどころか、心待ちにするなんて。そうじゃない。ここは彼女がそう

したように、拒絶すべき場面のはず。

「えっと……ええっと……」

冷静さを取り戻そうとして胸を押さえる。心臓が妙にドキドキしている。自分の妄想でこんなに興奮するなんて、どうかしている。

「だって、彩守さんがあんな可愛い顔するから……じゃなくて！ ええっと……そ、そう
だ、想像するからいけないんだ」

だから頭の中で妄想が暴走する。もつと具体的なものを見れば、ちゃんと反省できるはず。夏希は身体を起こして部屋の明かりを点け、机の上にあつた雑誌を手に取ると、再びベッドに腹ばいで転がった。ぺらぺらとページをめくり、目的の写真を見つける。

数日前に買ったファッション雑誌。もちろん、お目当てはMAYUこと彩守茉友。彼女が本当に載っているのだと知った時は、感動すら覚えた。

「彩守さん、笑ってる。だけど……」

春物のジャケットにトートバッグを肩から提げて、ロングのフレアスカートを風になびかせる彼女は、他の綺麗系のモデルとは一線を画す可愛らしさ。

でもその表情は、夏希の眼には不自然に映った。ちゃんと知り合う前なら何も思わなかったかもしれないけれど、内気な自分に鞭打って、無理して笑顔を作っているようにも見える。仕事というなら、そういう努力も必要なんだろうけど、どこか痛々しい。

素人の夏希に心配されるなんて、余計なお世話かもしれない。それでも、茉友の写真を

見ているだけで胸が締め付けられて、息が苦しくなってくる。

「彩守さん……」

癒してあげたい気持ちだが、夏希を動かしていた。誌面で薄く微笑みを浮かべる茉友に、唇を寄せる。写真の彼女にキスしていた。無機質なはずの紙に温かみを感じる。彼女の唇の柔らかさを、思い出さずにいられない。

「彩守……さん……」

とろりと、まどろむように目蓋が重くなった。雑誌を開いたまま枕の横に置くと、ベッドに仰向けになった。左の胸に手を置く。さっきの動揺とは違うドキドキが、小さいけど速い鼓動が、ブラジャー越しに掌に伝わってくる。

夏希は、ゆっくりと息を吐き、唇に乾きを感じて、ぺろりと舌で湿り気を与えた。

「あ……」

敏感な唇が、舌の動きに過剰なまでに反応し、急に鼓動を跳ね上げた。後悔も反省もどこかに吹き飛び、キスの再現に意識を奪われる。まるでそこに彼女がいるかのように、小さく震える唇を擦りつける。

「あうっ……!!」

ゾクリとした痺れが背筋を走った。胸に当てていた左手で、反射的に乳房を鷲掴みにする。すると先端がブラの内側に擦れて、もっと大きな電流が夏希の身体を跳ねさせた。

「うんッ、あッ……!!」

喉の奥から喘ぎが漏れた。自分の声とは思えない、甘く切ない響きに戸惑う。誰が聞いているわけでもないのに、なぜか無性に恥ずかしい。でも、静電気のような痺れが心地よくて、ブラの内側で硬くなりつつある蕾を、布地越しに中指でコリコリ転がす。

「ふぁう……あ……ンッ」

身体が火照ってきた。胸で生まれたそれは次第に熱量を増し、お腹の奥と、そこより下の脚の付け根の中心を、じわじわと炙り始める。

（あ、これ……始まつちゃう……）

鈍りつつある思考の中で、夏希は予感と期待に震えた。時々身体に訪れる、この気だるくて甘美な熱。夏希はそれに逆らえず、モジモジと内腿を擦り合わせた。息が速くなってくる。脚の間が疼いて我慢できない。

「だ、だめ……なのに、こんな……でも、くっ……ふうううん」

仔犬のように鼻を鳴らして、夏希は身体を苛む疼きに耐えた。

オナニーは、初めてじゃない。覚えてた頃の頃なんて毎日だったし、受験勉強の最中だった、ストレス解消で、たまにだけど、していた。特に好きな人やアイドルなんかがいたわけじゃない。何かの拍子でそこを触って気持ちよさを覚え、そしてそれが性欲だということを知ってからは、快感への好奇心に夢中になった。

でも、誰かを思い浮かべたわけでもない自慰は、快感も頭打ち。次第に回数も減って、進学してからはすっかりご無沙汰。それなのに、こんな強烈な疼きは久しぶり——いや、

初めてだった。耐えようと思つて内腿に力を入れると、妖しい感覚がお腹に響く。

「い……今は、こんなことしてる場合じゃないのに……」

茉友を傷つけたかもしれないのに、自分は快感を求めるなんて。

「彩守さん……。あ、彩守さ……。あんっ！」

なのに、彼女の悲しげな顔を思い浮かべたら、下半身の疼きが、うねるように大きくなつた。自分を懲らしめるように、ブラごと乳房に指を立てる。でも、そんな布地越しでは何の効果もない。カップをずり上げ、露わになつた乳首を二本の指で摘み上げる。

「ヒッ……いいッ!？」

甲高い悲鳴が喉から迸つた。今までに感じたことのない鮮烈な電流が背筋を走る。それを鎮めようとして乳首を捻るけど、まるつきり逆効果。癖になりそうな魅惑的な痺れが身体中を包み込む。

「あ、くふッ……。な、なにこれ……。こんな……。初めて……。あうっ！」

意識が朦朧とし始めた。やめようという意思は徐々に薄れ、夏希の指は自分の乳首を小刻みに弾いた。ピンクの突起が震えるたびに、自制心が削り取られる。

「だめ……。だめえ……」

否定の言葉を繰り返すけど、もはや、そんなものはただの言い訳。両手は捏ねるように乳房を揉みしだき、すっかり硬くなつた乳首を指先で転がす。背中や腰が何度も小さく跳ね上がり、もっと大きな快感を要求してくる。

「はあ……あああ……」

でも、もつとも快感を欲しがっていたのは、熱い吐息を漏らす唇。かすかな喘ぎにくすぐられ、彼女の感触を思い出す。触れただけの短いキスの、心地いい記憶を呼び起こす。

「彩守さんの唇……柔らかかった……。ああ……違う……。そんなこと考えちゃ駄目なんだってば……。でも、でも……許してもらえらなら、もう一回……。あうん！」

そうだ。茉友の唇に触れた時、夏希は確かに気持ちいいと思った。彼女とのキスを想像すると、もうそれだけで唇が快感に疼く。

キスしてしまった瞬間の、彼女の戸惑いに震える長い睫毛、揺れる瞳。罪悪感と、それを上回るときめきに、ズキンとした快感が股間を襲った。堪らず右手で、疼きの発生源を押さえる。その瞬間、ハッとして眼を見開いた。自分でも驚くほどの、熱さと湿り気に欲情した時に漏れる恥液が、下着の外まで染み出している。

「こんな……ああ……すごい……っ」

触ってしまったら、もう止められない。自分の意思とは関係なしに、中指と人差し指が動き出した。身体を中心の溝に沿って、せわしなく上下する。

「ンッ……くっ……。は……。ああ……。うんっ、くううんん！」

階下には母親がいる。頭の片隅に残ったわずかな理性で必死に声を抑えるけれど、身体の方はお構いなし。暴走し始めた指先が、乳首を弾き、恥裂を擦る。

「あんっ、ダメ……。こんなの、ダメだって……。ダメなの……。あッ！」

下着の中で、秘裂が開くのを感じた。とろとろの液が布地に吸い込まれていく。もう我慢できない。直に触りたい。濡れた恥裂に指を割り込ませ、思いきり掻き回したい。夏希のそこも、激しくなる疼きで満たされたい想いを訴える。

でも、たとえ一瞬でも、そこから指を離すのは苦痛だった。いま味わっている快感と、もっと直接的な快感への欲求への板挟みに、頭を振って苦しみ悶える。

「助けて……助けて、彩守さん……!!」

身勝手と知りながら、傷つけたかもしれない相手に救いを求める。とはいえ、どの道ここに彼女はいいない。夏希は直接的な快感を諦め、下着越しの刺激で耐えた。まるでそれが罪滅ぼしであるように、都合のいい解釈をして。

「んっく、んふあっ。あふ……!! ど……どうしてこんな……。すぐく感じて……。ああ、すぐ……。おかしくなる……。っ!!」

なのに、堪らなく気持ちいい。震える指先が下着を擦ると、布地を一枚挟んでいるとは思えないほど激しい快感が、背筋から頭へと突き抜ける。

「んふあっ!!」

お尻が浮くほど腰が跳ねた。勢いで指先が恥裂に食い込む。胸を刺激していた左手が、まるで感電したように引き攣り、ベッドのシーツを掻き巻く。

「いい……。気持ち……。いいっ!!」

唇を噛んで快感に耐える。赤ちゃんのように膝を折り曲げ、手の動きを封じるように内

腿をびったり閉じる。それでも指は股間の奥深くに潜り込み、淫裂を掻き巻る。

でも、こんなに気持ちいいのに、一番欲しいのはそこじゃなかった。

空気を求めてばくばくと動く唇が、寂しい。何か物足りない。

「彩守……さん……」

彼女の名前を呼ぶたびに、胸が切なくなる。初めて彼女に出会った時のように締め付けられ、なかなか会えなかった時のように苦しくなる。避けられ続けた時のように、悲しさでいっぱいになる。どうして、彼女を思うだけでそんな風に感じるんだろう。

「あたし……まさか……あたし……!!」

その理由が言葉になる前に、指で擦られた陰唇から強烈な電気が走り、頭の中を混乱させた。快感は夏希から思考を奪い、欲求だけを叫ばせる。

「キスしたい……。彩守さんとキスしたいよお……!!」

茉友の唇を感じたかった。柔らかくて甘い彼女が欲しかった。彼女を驚かせてしまったことを半ば忘れて、もつとちゃんとキスしておけばよかったと後悔する。

シーツの上をさまよっていた左手が、いつの間にか脇に転がっていた枕を掴んだ。夏希はそれを引き寄せて、それが茉友であるかのように掻き抱いた。

「ああ、彩守さん……柔らかい……」

いくら何でも、茉友の身体が枕ほどふにゃふにゃのはずがない。それでも夏希は、必死の思いでそれを抱き締めた。すると、オナニーでピンク色に染まった頭が錯覚を起こした



のか、一瞬、彼女からも腕を伸ばしてくれたような感覚があった。

それだけで胸がいつぱいになるほど感激した夏希は、夢中で手を動かし続けた。閉じていた脚が自然に開き、立て膝になってオナニーの快感を貪る。

「ふあ……あ、あ、ああンッ！」

下着の布地と性器が擦れ合い、ザラザラとした快感に腰が跳ね回り、踊りまくる。ひと擦りごとに体温が上昇し、頭の中を沸騰させる。

「彩守さん……ああ……。彩守さん、可愛いよお……」

何度も彼女の名を呼びながら、夏希の愛撫のストロークが大きくなった。淫裂の先端からお尻近くまで、指が激しく往復する。思考が真っ白になっていく。まるで風船になったように、身体がふわりと浮き上がる。

「き、気持ちいい……ッ！ 気持ちよすぎて……あたし、もう……もうイク！」

絶頂に近い。でもこんなに身体が踊り狂う快感は初めて。経験したことはない高みへ昇り詰めることに恐怖さえ覚え、夏希は抱き締めた枕に歯を立てた。

「あああ彩守さん……彩守……さんっ！ あっ、すご……い！ いく、もうイク、イツちゃう、イツ……きゆうううッ!!」

指先が淫核を掠め、夏希の身体が大きく仰け反った。堪らない快感電流が背筋を何度も駆け抜けて、腰を大きくバウンドさせる。

「あうっ、ンあああう、ふあ、ンンん……くッ……！」

「触ってくれなきゃ、もうキスしない」

「そんなっ……………」

あつさりと先手を取られた。しかも、反射的に泣きごとを漏らした後では言い訳もできない。勝ち誇った、というよりも必死の表情で、茉友が夏希の手を胸に抱え込む。

(ちよ……………！ そ、そんな強くしたら……………)

否応なしに、掌で感じる彼女の膨らみと柔らかさ。Ｔシャツ越しにも、早い鼓動が伝わってくる。その緊張が伝染したように、夏希の心臓も高鳴った。喉が渇く。お腹の奥が疼く。間近で顔を火照らせる少女が、欲しい。

「ほ、本当にいいんだよね……………。駄目って言っても、止められないよ……………？」

「……………いっぱい……………気持ちよくして……………」

秘密めいた囁きに、夏希の理性の糸が切れた。小柄な肢体を、ベッドの上に押し倒す。

「茉友……………茉友……………」

「夏希ちゃん……………。ん、ふ……………あああ……………」

キスをする、茉友は夏希の手をより一層強く抱え込んだ。凶らずも彼女の乳房を鷲掴みにする格好になり、好都合とばかりに指を動かす。

「ン、あッ！」

たったそれだけで、茉友は喉を仰げ反らせて鋭い喘ぎを漏らす。

「そんな大きな声出したら、誰かに聞かれちゃうよ？」

茉友が慌てて手で口を覆う。まだ授業中とはいえ、ここは学園内。誰に聞き咎められるか分からない。でも焦る彼女は可愛くて、つい意地悪をしたくなる。

「いっぱい、気持ちよくしてあげるからね……」

いったん胸から手を離し、Ｔシャツの中に潜り込ませた。無駄なお肉なんてまったくない、すべすべのお腹を撫でるように進みながら、裾を捲り上げていく。その間、指先で肌をくすぐると、小柄な身体がピクピクと大きく引き攣る。

「やっ、あつ、ンッ！ くすぐりたい……あん、ふぁ……きゆうん！」

必死に声を殺し、それでも抑えきれずに細い息が漏れる。まだ始まったばかりだし、敏感な場所にも触れていない。本格的に愛撫したら、どうなってしまうんだろう。

（やだ……。ゾクゾクしてきちゃった……）

苛めてみたい。どんな可愛い声で鳴くのか、聞いてみたい。眉間を寄せる彼女の切ない表情に、脚の間が妖しく疼き出す。内腿を擦り合わせて欲情をごまかしつつ、彼女のＴシャツを一気に捲って剥ぎ取った。

「やッ……あああん……！」

自制心を総動員し、蚊の鳴くような声で悲鳴を上げる茉友。露わになった肌が、一瞬で羞恥の桜色に染まる。上半身を守っているのは、レモン色の簡素なスポーツブラだけ。それも一気に剥ぎ取りたい衝動に駆られるけれど、楽しみは後に残したい。代わりに目に飛び込んできたのは、頼りなげに揺れる細い首筋。夏希は息を飲み、思いきりかぶりついた。

「あんツ。なにこれ……。夏希ちゃん、くび……。首、痺れ……。つ、ンく……。ふっ！」

頸動脈を何度も舐め上げると、それだけで絶頂したのかと思うほど、茉友は激しく身体を痙攣させた。快感に不慣れな身体の、新鮮すぎる反応に、夏希は興奮を抑えきれない。

ひとつ深呼吸吸って、首筋に吸いつく。茉友は「ヒツ!？」と短い悲鳴を上げて腰を跳ね上げた。その状態で細かく舌を動かせば、小柄な身体は逃げようとするように暴れ回った。そんな彼女の手首をベッドに押さえつけ、執拗に頸動脈を吸い上げる。

「どう、茉友……。気持ちいい？ ……ちゅ、ちゅううう……」

「ン、ふあ……。わ、分かんない……。これが、気持ちいいってことなの？ 首……。だけじゃなくて、身体……。あっちこっち痺れて……。あん、きゅふ、ふああンツ！」

ちよつと唇を動かすだけで、彼女の言葉は瞬時に喘ぎに変わってしまう。腰が大きく跳ね上がって、しっかりと体重を掛けていないと飛ばされてしまいそうだ。

震える首筋を唾液でベタベタにした夏希は、今度は細い鎖骨に沿って唇を這わせた。ブラのストラップをずらし、まるやかなラインを描く肩にも口づける。

「ん、はあああ……」

敏感なポイントでもないと思うけど、茉友は喉を反らせ、長くて熱い息を吐いた。再び鎖骨を辿って、胸の膨らみ始めの麓を舌先でなぞり、また肩まで戻る。それを繰り返していたら、いつからなのか、茉友が恨めしそうな目で夏希を睨んでいた。

「どうしたの茉友。気持ちよくない？」

「よく……なくはないけど……。でもお……」

その先が言いづらそうに、瞳を逸らして口籠もる。夏希には分かっていた。彼女がチラチラと向ける視線でも、それは明らか。

「んふ。茉友……おっぱい触って欲しいんでしょ？」

これだけ焦らされて、肝心のところには一向に触れようとしないのだから。きつとブラの内側では、待ちぼうけの蕾が身を硬くして疼いているに違いない。もし夏希なら、とつと根負けしておねだりしている。でも茉友の強すぎる羞恥心が、かえって彼女を苦しめていた。もちろん、早く触ってあげたい。何よりも自分が触りたい。でも――。

「だーめ。そんなエッチな娘の言うことなんて、聞いてあげない」

「そ、そんなあ……!!」

茉友が情けない声を上げた。さつき「キスしてあげない」と意地悪された仕返し。とはいえ、ここからどう焦らそうか、具体的なプランはない。

ふと、恨めしげに身を振る茉友から、甘い匂いが立ち上った。夏希はそれに惹かれるように、自然と舌を伸ばす。

「ひあつ!? な、夏希ちゃん、どこ舐めて……ひいいいッ!!」

茉友が、彼女には似合わない奇声を上げる。無理もない。脇の下なんかを、犬のようにペロペロされているのだから。きつと自分でもそうなるだろうなと頭の隅で思いながら、しかし夏希は、新発見のポイントに夢中になっていた。

「やだやだ夏希ちゃん……そんなとこ、くすぐりたい………恥ずかしいよお……！」

茉友は必死に身を振るけど、両手首を頭上で掴まれているのと激しい羞恥で、ろくに抵抗できずにいる。それをいいことに、彼女の脇を思う存分堪能した。そこに特別な感触はない。でも、ひと舐めごとに甲高くて可愛い悲鳴がして、それが夏希の頭の中を心地よくくすぐった。次第に頭が呆けてきて、さらに彼女を追いつめることを漏らしてしまう。

「……………汗の匂いにする」

「そつ——！ それはさつき体育で……だから駄目だつてばあ！」

こんな匂いは、きつと激しい運動をした後の今だけ。茉友は必死に脇を隠そうとするけど、夏希の頭が邪魔で叶わない。羞恥に性感を煽られた茉友は、息を詰まらせながら激しく腰を上下させた。

「ふっ、あッ、ひっ……ああああん！」

「そんなに大きな声出すと、誰かに見られちゃうつてば」

「だ、だつて……だつてだつて、夏希ちゃんが……。やああん……ばかあ！」

大粒の涙が、茉友の頬を伝って落ちる。少し苛めすぎたかもと反省した夏希は、その涙をキスで拭った。

「ごめんね……。それじゃ今度は、お待ちかねのところ、イジメてあげる……」

はあはあと息を荒らげ、見上げてくる濡れた瞳。期待と不安が入り混じる妖しい色に、胸がズキンと高鳴る。激しくキスを求め、舌を絡め合いながら、掴んでいた彼女の手首を

片手でひとまとめに。空いた右手で、ご希望通りスポーツブラに手を掛ける。

「や、あ……」

いざとなると怖いんだろう。茉友の瞳に怯えの色が強くなる。それでも今さら止められない。彼女のためというよりも、自分の欲求が先走り、容赦なくブラを捲り上げる。

「や……ああああ……!!」

ぼろぼろと、さつきよりも大量の涙が零れ落ちた。そんな綺麗な雫も、今だけは、この美しい半球以上には夏希の気を引けなかった。

仰向けになっているのに、少しも形が崩れない、張りのある乳房。控え目な彼女にしては主張の激しい、Eカップのボリューム感。薄いというより、淡いと表現した方が近い桜色の乳首。同性なのに、自分の胸にも自信があつたのに、惹きつけられずにいられない。

「茉友のおっぱい……綺麗……可愛い……」

手首を掴まれているせいで顔を覆うこともできず、茉友は首を左右にくねくねと揺らすだけ。でも、夏希は彼女の胸から目を離せなかった。目を見張った。呼吸をするたびに上下する、豊かな乳房。その頂上で、淡い蕾が少しずつ膨らんでいる。

「み、見ないで……。恥ずかしくて……。死んじやいそう……」

「……茉友から見えてって言ったんじゃない。それに……。これくらいで死んでちゃダメ。これから、もーっと恥ずかしくなっちゃうんだから……」

「もっとなって……。待って夏希ちゃ……!!」

耳に囁きかけると、茉友の瞳がカッと見開いた。何かを言いたげな口をキスで塞ぐ。同時に、すっかり硬くなって円錐形に立ち上がる乳首を、指先で思いきり弾いた。

「ン、んむゝッ!!」

茉友の背中が小さく反って跳ねる。もちろん一回だけでは終わらせない。指の腹で繰り返し、素早い動きで薙ぎ払う。時折、たっぷりとした手ごたえの乳房を下から捏ね上げ、揉みしだく。自慰で覚えた拙い愛撫を、愛する少女に施す。自信は半々だったけど、彼女が堪えきれずに漏らす喘ぎに安堵して、さらに強い刺激を与えてみる。

「んあ……な、夏希ちゃん……!　そこ、おっぱい……ウズウズして……くうん!」

茉友の喘ぎと唾液を、舌と一緒に搦め捕る。乳首を、少し痛いくらいに摘んでみる。

「あああう!　ひあつ、ふあつ、んむうううん!」

でも彼女は逃げなかった。それどころか、自ら夏希の唇に吸いついてきた。

「んっ、ぶあ……あ、はあ……。茉友ってエッチだね。痛いのに感じちゃうんだ」

「ち、違……エッチなんかじゃ……。でも、どうしてこんな……きゅふっ……」

自分の身体の中で起きていることが、まだ認識できていないみたいだ。寄せた眉に混乱が見える。それならと、夏希は身体の位置をずらして胸に顔を寄せた。もう手首を拘束している必要はない。両手で乳房を掬い上げ、すっかり硬直した乳首を口を含む。

「あふうう!　きゅっ……ふうううん!」

強めに吸引すると、か細い鳴き声で肩を掴んできた。抱き寄せようか、それとも撥ね退

けようか、指先の動きに彼女が迷っているのが分かる。それを払拭させるためにはと、淫熱に侵された頭で考えた夏希は、自分でも驚く行動に出た。

「あう!! な……夏希ちゃん、いたっ……痛いッ……!!」

グミのような勃起乳首に、グリグリと歯を食い込ませた。茉友が恐怖心で身体を竦ませる。甘噛みにすぎないけれど、そんなところに初めて噛みつかれたら実際以上の衝撃だろうし、多分、乳首はジンジン痺れているはず。でも、それが狙い。初めにきつめに噛みついて、彼女の我慢がピークに来た時、すかさず唾液を纏った舌で舐め上げる。

「ふ……あつ!! ふわ、ああああ……!!」

どっちつかずだった茉友の手が、夏希の肩を抱き締めた。癒すようなソフトタッチで舌先が乳首を跳ね上げると、夏希の背中に爪を食い込ませるほど力が入る。

「な、なにこれ……!! おっばい、が……痺れて……温かくて……ふああ……!!」

痛みと心地よさに同時に襲われ、茉友は完全に混乱していた。

「んふ……。あたしも茉友に同じようなことされたから……。気持ちいいでしょ?」

「う、うん。うん! きッ、気持ちいい……。すっごく……。いい……。ッ!!」

あんなに戸惑っていた茉友が、驚くほど簡単に快感を叫んだ。痛みでよくなってしまうなんて、変な癖がついたらどうしようと思うと頭の隅で後悔したけど、もう遅い。反対の乳首も歯で転がし、思いきり吸引し、それから唾液いっぱい舌で優しく包む。

「はああ……。きゅ、ふうん……。なんか、身体……。変だよお……」

どこに異変を感じたのか、茉友が身体をモジモジくねらせた。特に、しきりに内腿を擦り合わせている。その動きに、もちろん夏希は覚えがある。

「……茉友。……お股、濡れちゃってるでしょ？」

耳に囁きかけると、うっとり快感に浸っていた彼女の目が、思いきり見開かれた。夏希の顔を横目で見ながら、唇をわなわなと震わせている。

「ち、違う……よ……。わたし、お漏らし……違う、違うよ！」

「大丈夫、心配しないで。それは、おしっこじゃないから」

「……え？」

訳が分からないという顔で、夏希を凝視する茉友。本当に知らないんだなと思ったけれど、呆れはしなかった。自分にも、彼女に教えられることがあることが嬉しい。たとえそれがエッチなことであろうとも。

「茉友、お尻上げて」

腰に手を添える。一瞬だけ戸惑いを見せたけど、不安に襲われている彼女は素直に従った。スパッツを脱がせ、下半身も下着だけにす。

「んふ、やつぱり……」

下着の真ん中の色が、仄かに変わっている。彼女がいつぱい濡れている証拠。

「な、何……夏希ちゃん。そんなところ……恥ずかしいよお……」

「正常だってことだよ。女の子はね……気持ちいいと濡れちゃうの。……ほら」

茉友を安心させるため、夏希もスパッツを脱ぎ、そしてクロッチ部分から下着の中に入れて。もの凄く恥ずかしい行為のはずなのに、あまり羞恥を感じない。それよりも、彼女に自分の興奮を見せつけて教える悦びに身体が打ち震える。

「見て……。あたしの指、濡れてるでしょ？ 茉友も同じだよ」

べつとりと指先に付着する粘液を、茉友は驚嘆の目で凝視した。その指を、濡れたまま彼女の股間に運ぶ。脚の付け根、下着の縁の鼠径部に触れると、一瞬、小柄な身体が強張った。でも、混乱と驚愕で、反応していいのかわからないでいる。彼女の思考が働き出す前に、夏希の指は下着の細い底布の内側に潜り込んだ。

「あ……あああ!!」

股間を誰かに触られるなんて、茉友には相当なショックに違いない。逃げることさえできないパニックに陥り、夏希にしがみつく。しかし指先は容赦なく進み、秘裂に届いた。ぐちゅりと、卑猥な水音する。想像以上の濡れ方と、柔らかな淫肉に包まれて、夏希の身体にも悦びが走る。

「凄い……茉友のこれ、気持ちいい……ああ、柔らかくて……温かい……」

「な、夏希ちゃん……怖い、わたし……」

「大丈夫だつてば。あたしが、茉友に酷いことすると思う？」

眼を見詰めて語りかけると、徐々にではあるけれど、彼女の身体から力が抜けた。さっきまでのような恐怖心は消えている。信じてもらえたことが嬉しくて、夏希は彼女の唇に

思いきり口づけた。

「可愛い……。茉友、好き……。大好き。いっぱい気持ちよくしてあげるからね……」

「う、うん……。夏希ちゃん。……………して」

やっと本来の目的に戻って、夏希は本格的な愛撫を始めた。不安にさせないように、茉友の肩を抱き締めながら、ゆつくりと恥裂の壁を震わせる。ここは、胸以上にデリケートな場所。オナニーで慣れているとはいえ、夏希も誰かのものに触れるのは初めて。傷つけないように、痛くしないように、優しく恥褻を掻き分ける。

「あんっ。は……。あう。夏希……。ちゃん、わたし……。身体、熱くなっ……。ふぁ！」

ゆつくりとしか動かしていないのに、それでも性器初体験の茉友には刺激が強いのか、身体が激しく震え出した。両手で夏希の背中を抱き締め、必死に唇に吸いついてくる。

「茉友、手がきつい……。もつと脚を開いて……」

「で、でも夏希ちゃん……。あ、ああ……。な、夏希ちゃん……！」

混乱中の彼女に、身体をコントロールできるはずがない。夏希は、茉友の膝の間に脚を割り込ませ、開脚を強いた。動きやすくなった指で、円を描くように淫裂を撫でると、愛液がねっとり絡みついてくる。その温かさどぬめりに興奮し、摩擦の速度を上げていく。

「ふあああ！ すご……。な、何これ夏希ちゃん、なにこれ、すごい……。ああああう!!」

自分の指で茉友が感じている。でも、声が大きくなるのが気がかりだった。今の彼女を抑えるというのは無理。



「ん……ンン、んふ……っ」

触れ合い、微かな吐息を感じると、もう歯止めは利かなかつた。くすぐるように唇を舐めて、彼女も舌を出すように促す。

「ん、ふあ……」

小さく身体を震わせながら、彼女の舌が先端だけ顔を出した。それをパクリと咥え込んで、吸引するように引き摺り出す。表面同士をねっとり擦り合わせると、ザラザラする感触が気持ちよくて、茉友だけでなく、夏希も痺れるように背中を震わせた。

「ンあっ……！ あふ、ン……はあ……ま、ゆ……う！」

喘ぎながら舌を絡める。彼女も、もがくように夏希の背中を抱き寄せる。胸と胸が密着して、ブラを挟んでいるのに、彼女の乳首が硬くなっているのを感じる。身体をくねらせ乳房を捏ねると、声が漏れるのを我慢できない。

「ンあっ。おっぱい気持ちいい……茉友ッ！」

「やん、夏希ちゃん動かないで……。おっぱい擦れて……。ふ、あ、ああ……あんッ」

快感に耐えかね、茉友が背中を反らせた。さらに乳房が潰れて刺激が強くなる。動くと言われても身体が勝手に動いてしまう。

「ああ茉友……茉友、ま……くふあっ!!」

もがく茉友の指先が、夏希の背中を逆撫でた。堪らず絨毯に爪を立てる。その間に、ブラのホックが外された。身体の上下を入れ替えて、夏希も彼女のブラを脱がせた。でも、

それを放り投げようとした手が、何かに縛られたように自由が利かない。

「あ……あれ？」

抱き合って転がった時に、散らばっていた服が絡みついたみたいだ。解こうとして茉友から目を離した、その一瞬の隙に、唇が塞がれた。

「あは……夏希ちゃん……」

「あんっ、もう……茉友ったら……。ちよつと待って……。ン、あ……」

執拗に唇を舐められたら、夏希だって欲しくなってしまう。作業をいったん中止して、キスに応えた。快感で身体を振らせるたび、脚にも服が絡みついて、ちよつとギリシャ彫刻の女神にでもなった気分。うつとりと眼を閉じて彼女の唇に酔い痴れる。けれど、何だか様子がおかしい。身体の上で、茉友がごそごそ動いている。

「茉友、何して……。あ、あれ？ あれえ!？」

自由が利かない程度だった腕が、ほとんど動かない。例の赤いチューブトップやTシャツが、手首にぐるぐるすると無造作に巻きつけられて、完全に自由を奪っている。

「ちよつと茉友、これって……。ふ、あ……。ふあつ!! はあああああ……」

彼女は問いに答えることなく、胸に吸いついた。それだけなら、いくらでも好きにさせてあげるのにと、快感の中でぼんやり思っていたら、彼女の舌が不規則に移動した。胸からお腹、脇腹へ。そしてまた胸へ戻って、今度はおへソの周りで円を描く。どこかを目指しているような感じもするけど、やけに迷走している。それが気になって、気持ちいいの

に快感に集中できない。

「ン……はあああ……。ねえ茉友……。どうせなら、下の方も……」

「うん、下……。下、だね……」

愛撫が上半身に集中していたので、何となく下半身の方をリクエストしてみる。すると彼女は曖昧に答え、一応はその通りに、舌を移動し始めた。それでも途中で寄り道して、脇腹を執拗なまでに舐め続ける。

「ン、ん……。ッ、あつ！　そ、それ気持ちいい……。そこ、そこもつと……。あああ……」

予想とは違っていたけど、これはこれで気持ちいい。くすぐったさと快感の狭間で、声がかすむ。でも、それすら彼女の最終目的地じゃなかった。ふと気がつくと、まるで夏希の様子を窺うような、自信なさげな上目遣いでこちらを見ている。

「茉友……?」

「な、夏希ちゃん……。わたしのこと、変だつて……。思わないでね……」

「え？　うん……」

意図が分からないまま頷くと、彼女は意を決したように頷いて、夏希に残されていた最後の下着に手を掛けた。そこを触られるのも初めてではないので、何も考えずお尻を上げて脱ぐのを手伝う。すると、小さな布切れが脚を伝う。その感覚に違和感を覚える。

(……あれ、そういえば……。全部裸になったところ……。見られたこと、ない?)

考えてみれば、今まではたいてい下着越し。直に秘所を触られた時ですら、スカートで

隠されていた。剥き出しの恥裂を直接彼女に晒したことはない。

それに気づいた途端、急激に猛烈な羞恥が襲ってきた。慌てて脚を閉じようとするけれど、すでに茉友の身体が間にあって叶わない。本気で抵抗を始める前に、パンツが足首から抜かれてしまう。

「きやああ！　ちよ、ちよつと待つて茉友！　見ないで……見ない……で……」

「はああ……」

諦めに似た気持ちだが、夏希の声を小さく掻き消す。それとは対照的な熱い息が、股間に吹きかけられた。感じる。彼女が、茉友が、一番恥ずかしい場所をまじまじと凝視している。羞恥で眼を開けられないのに、見られているのがハッキリと分かってしまう。

「あ、動いた……」

彼女が、驚嘆したように呟いた。何が動いたのか分からず、緊張で内腿に力が入る。でも、それが脚の間を強く意識させ、彼女が見たものを察してしまう。しかも、頭の中でそれが言葉になる前に言われてしまった。

「夏希ちゃんのこと……ヒクヒクしてるよ……。ほら、また……」

「や、やああつ！　何を言つて……違つ……やあああ、茉友のばかああ……！」

茉友の言葉が、呪文のように自分のそこを強く意識させる。ほんの微かの動きなのに、自分の性器が引き攣っているのを感じてしまう。貝肉のように蠢く肉壁から、とろりとした粘液が流れ落ちるビジュアルが頭に浮かび、その通りのむず痒い感触がお尻を伝う。

「やんっ……。ま、茉友う……。あ、あたしのそこ見るために、こんな……？」

縛られた手首を頭の上で左右に振って、涙で霞んだ眼で抗議する。すると、彼女は申し訳なさそうに眉を下げ、それでも身体を倒して夏希のお腹に何度もキスした。

「ううん、違う。ホントは、こんな形でするつもりじゃなかったんだけど……言葉にするのが恥ずかしくて……」

違う？ これ以上に恥ずかしいことなんて、何をするつもりなんだろう。羞恥と疑問で夏希の頭が混乱する中、彼女は脇腹をくすぐりながらお腹へのキスを繰り返した。その位置が徐々に下がっていく。下腹を過ぎ、逆三角形に萌え揃う草叢の周辺を舐められる。恥毛を見られ、触られるだけで、気が遠くなりかける。

でも、彼女はまだ止まらなかった。唇が、脚の付け根を強く吸い上げる。

「ヒッ、ひぁ!! そこ、そこ感じすぎ……っる! 茉友、待って……ンツきゅうっ!!」
肩に担ぐようにして脚を広げられ、鼠径部を何度も唇と舌が往復する。そのたびに静電気のような痺れと快感に下半身が襲われて、腰が上下に動いてしまう。

「ん、はぁ……。夏希ちゃん……ちゅ、気持ちいい……? ちゅ、ちゅば、ちゅっ」
「いいッ……すごく、いい……けどッ……。か……感じすぎて、あたし、あぁうん!」

そこを舐められるだけで、思っていた何倍も気持ちよくて、言葉が途切れ途切れにしか出てこない。快感が強すぎて逃げたくなるほど。けれど、お尻や爪先が下敷きになった服でつるつる滑って、思うように移動できない。逃亡を図る夏希にお仕置きするように、茉

友が鼠径部の窪みを激しく吸引した。

「ヒッ!? いッ、あ、はああう、あッ、あああつ!!」

爪先から頭まで、鋭い電流が一気に走った。衝撃で、どろりと濃厚な淫蜜が恥裂から大量に零れ落ちる。下半身なんて完全に力が抜けて、茉友が内腿を大きく開いても、何ひとつ抵抗できない。

「気持ち……気持ちいい……よすぎて、許して……」

「ただだよ、夏希ちゃん……。これからが、本番……」

すでに息も絶え絶え。なのに、まだ先があることに戦慄すら覚える。茉友の手が、さらに夏希の脚を押し開く。顔が股間の向こうに沈んでいく。

「え……? え、まさか……茉友!?!」

彼女の思惑に思い当たった瞬間、身体を中心に何かが押し当てられた。柔らかくて、それでいてしなやかなものが、夏希の秘裂を優しく抉る。

「ど、どうしてそんなこと……!! ダメだよ茉友、だめ……だめ……!!」

信じられない。茉友が、夏希の性器に口を当てている。淫裂を舐めている。

そういう愛撫があるのは知っている。むしろ、いつか自分が茉友にしようと思っていたくらい。それを、彼女の方からしてくるなんて。心の準備どころか、予想さえしていなかった心と身体では、この感覚を受け止めきれない。

「あああ……なにこれ……。へ、変な感じ……。なに……。身体、浮いちゃう……!」

さつきまでの、痛いほどの鋭さはない。指での愛撫のような強さもない。なのに、全然違う。まるで大きな波に飲まれていたみたいだ。彼女が舌を動かすたびに、うねりのような快感が身体の中を繰り返し駆け抜け、ともすれば意識が飛びそうなほど翻弄される。

「お願い、やめて！ あ……あたしなんか、こんなこと……だめだったらあ！」

「ん……どうして？ 気持ちよくない？ ちゅ、ちゅるっ。ちゅるるる、じゅぱっ」
「そ、そういう問題じゃ……あう、ンあうっ！」

度重なる女の子の行為で抵抗が薄れているのか、茉友は、初めてとは思えないほど大胆だった。陰唇と唇を重ね、秘裂をねつとりと舐め上げる。どんなにエッチなことをしても恥じらいと清純さを失わない彼女が、自分の性器にキスしている。夢を見ているのかと思っただけ、膣前庭の粘膜で感じる快感は、紛れもない現実。

「あっ……はああうッ、きゅふうう……！！ ま、茉友……どこでこんなこと……あう！」

「はあ……はあ……な……夏希ちゃんに気持ちよくなって欲しくて……ん、はあ……わたしも……色々なもの読んで……ちゅっ、じゅぱっ、じゅる、ずるるっ！」

「ンふああああ！ そんなに吸っちゃ……ダメ、あああう、やああん！」

茉友が立てているとは思えない卑猥な音で蜜を啜られ、堪らない羞恥で頭が貫かれた。頭の中に桃色の靄が掛かって、何も考えることができな。ただ、彼女が自分のために努力してくれただけに驚き、それが無性に嬉しくて涙を零す。

（どうしよう……どうしよう。すっごく……ああああ……）

そんなところに口をつけさせている罪悪感と、あまりに甘美な背徳感に、背筋が蕩けそうだ。無意識に腰が動いてしまう。円を描くように、卑猥なダンスを踊ってしまう。それが、彼女のキスの位置を変えさせた。淫裂を掻き分けるように動いていた舌が、不意に、硬くなった肉芽を掠める。

「は——ッ、あ、はあああッ!？」

カッと目を見開いた。女の子の身体で、一番敏感な肉芽に電撃が走る。大事な部分を思いついた茉友の攻撃が、そこに集中し始めた。キスで覚えたテクニクでクリトリスを小刻みに震わせる。

「ま、待って茉友！　そ、そんなにされたら、あたし……も、もう……!？」

このままでは自分だけが達してしまう。快感に翻弄されながら、夏希は必死に訴えた。

「お願い……あたしも……あ、あつ！　あたしも、茉友を……!!」

早くしないと手遅れになる。すると、その想いを通じたのか、彼女が姿勢を変え、くるりとお尻を向けてきた。しかも驚いたことに、夏希の股間に唇を吸いつかせたまま。そして、もどかしげにお尻を振りながら下着を脱ぎ、悪戦苦闘の末に蹴り飛ばす。

「はあ……な、夏希ちゃ……夏希……ちやああん……」

泣きそうな声で、羞恥に震えながら、それでも茉友が、夏希の顔の上で脚を広げた。

「——!!」

その光景に、夏希は目を見開いた。息を飲んで釘づけになった。

同性の性器。大好きな女の子の秘密の場所。申し訳程度の薄い恥毛に彩られた秘裂は、今にも雫が垂れ落ちそうなほど、大量の透明な淫液を湛えていた。それを辛うじて溜め込んでいるのは、薄桃色の秘肉。

まるでキスを欲しがっているように、うっすらと開いた淫唇に惹きつけられ、夏希は、うっとり口づけた。

「ひ、あ……あああつ！」

お腹の方から、茉友の甘い悲鳴が聞こえる。それに心を溶かされた夏希は、夢中で淫裂に吸いついた。自由を奪われたままの手で必死にお尻を抱き寄せて、柔らかな粘膜の奥深くにまで舌を突き入れる。

「茉友、好き……ン、んむ……ちゅ、んちゅるっ」

「や、やん夏希ちゃん……！ いきなりそんな……はああん、ああああん！」

仕返しのように、茉友も淫裂へのキスを再開した。ちゅばちゅばと恥蜜の飛沫を飛ばしながら舌先で襷を掻き回し、膣口を抉る。縁をくすぐられる快感は、指で触られるより何倍も気持ちいい。疼きと快感に震えながら、夏希も彼女の秘穴を夢中で貪った。

「やん、やああん！ あ、あふ、ふあ……あああうんっ！」

茉友の内腿に力が入る。淫裂から恥液が滴り落ちる。それを口で受け止めることも、同性の性器を舌でまさぐることに、何の抵抗も感じない。

（だって、茉友のだから……！）



キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ?



ドキドキラブな
ハーレム系ライトノベル!

二次元
ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう!
かなり過激なライトノベル!

二次元
ドリームノベルズ

サイズ:新書

※盗作フリームをルビは10年未満の方購入できません

日常に密着したエロス、リアルな
舞台設定で送る官能小説レーベル!

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ!

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの
オフィシャルサイトにて!

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>